

# 「わたし」と「エチオピア」と「国際協力」と

富田 すみれ子 (大阪府 学生)

## ●僕たちは世界を変えることができない。But I do everything I can do.

小学校の卒業文集に書いた夢は「国連の職員になって世界の子ども達を笑顔にすること」。小学校、中学校、高校、大学を通してずっと国内外でボランティア活動を続けてきた私は、「国際協力」という言葉やJICAにも抵抗なく接してきた22才等身大の大学生である。高校の卒業式当日に東日本大震災が発生した。そして大学入学後、ずっと入ろうと考えていた国際協力サークルには入らずに、東北支援のボランティア団体を友人と共に立ち上げた。もし震災が発生していなければ、毎夏東南アジアのどこかに通い学校建設などに携わっていたのだと思う。アルバイトで必死に資金を作り、二ヶ月に一回は関西から東北へボランティアに通っていた私は「東北が大変な時に海外の発展途上国にODA資金を使っている場合ではない。」という意見が理解出来ない訳ではなかった。また、東北の復興だけでなく、国内には解決すべき社会問題が山積みだ。だからこそ私はODAの現場に行き、自らの目でODA資金の使われ方を確かめよう、現場で働く人々に会いに行こうと国際協力レポーターに応募した。

私がこれからのJICAの国際協力活動に提唱したいのは、「KAIZEN的日本ならではの国際協力」である。KAIZENとは、TOYOTA発の製造業の現場における品質・生産性向上の為の戦略・哲学の事をいう。日本に昔からある「改善」、という日本人にとってはごく平凡な考え方が、今世界で話題になっているのだ。そのKAIZENが遠く離れたアフリカの土地でビジネスの変革に使われているという事を私は誇りに思う。エチオピア前首相の呼びかけによりはじまったKAIZENはエチオピア全土で広く知られる。エチオピアカイゼン機構 (EKI) という名の機構まで存在し、EKIではKAIZENを学ぶ為のトレーニングが毎日のように行われている。

ODA資金の使い道や国際協力の形が問われる中で、KAIZENのようなケースこそが日本らしい国際協力の方法であると感じた。中国が進出するアフリカにおいて、日本だからこそ出来る国際協力や支援の形を考える事が重要だ。日本だからこそ伝えられる文化や技術がある。そして青年海外協力隊やシニア海外ボランティアのように日本人が現地に行き、本当に小さな変化を起こしていくこともまた、かけがえのないことだと私は思う。「僕たちは世界を変えることができない。But I do everything I can do.」ある映画のタイトルのパロディであるが、私は心からそう思うのである。

アワシュへは同行した現地メディアの記者が私達の視察を取材しながら行った。半日程かかるアワシュへの道中、私は記者と、国際協力、エチオピアとアフリカの発展とこれから、日本とエチオピアの関係などについて随分と話し込んだ。その中でも印象に残っているのが中国企業の巨大な工場を横目に記者が語った思いである。

「今年一月に安倍首相がエチオピアに来た。エチオピアは日本の企業が来る事を待ち望んでいるよ。何と言っても安倍首相が約束してくれたしね。」



「バイバイ！またね！」  
撮影：9月3日（水）  
オロミア州アワシュ・マルカサ高校前にて

現地の人々と出会い、そして記者との会話からも感じたのは日本に対する期待と尊敬の想いだ。期待と言っても、「お金持ちの国・先進国日本」への期待ではなく、「未来のビジネスパートナー」としての対等な関係への期待である。安倍首相がエチオピアへの日本企業の誘致を約束した今、これから日本に求められるのは対等なビジネス関係、そして「KAIZEN的日本ならではの国際協力」である。

## ●帰国後、浦島太郎状態になって初めて気付いた大切な事

エチオピアから帰国し、私は自分が生まれ育った日本という国を全く違う視点から見ている自分に気付いた。たった一週間のエチオピア滞在であった筈なのに、



「カメラを向けると子ども達は笑う。ファインダーの外で彼らは笑っているのか。」



KAIZENが導入されている靴工場働く男性  
撮影：9月2日（火）  
OK JAMAICA社の靴工場にて

帰国した当初の私は完全に浦島太郎状態になっていた。シンプルに一文で表すと、日本の豊かさと技術力の高さに驚き、そして困惑していたのである。一生忘れたくない、忘れるべきでない衝撃的な心境だった。

眩しいネオンが輝き、「もの」が溢れている日本は、エチオピアとはまるで別世界。帰国したその日は飛行機に乗ってワープして来たかのような感覚であった。17才の頃にベトナムを訪れた後も同じような感覚に陥った。しかしその時と比べ、今回自分が受けている衝撃の大きさにより改めて、世界最貧国の一つであるエチオピアの現状を思い知らされたのである。

日本ではトイレがきちんと流れ、帰国当日はシャワーの水圧の強さにも驚いた。停電もなく、町にはしっかりとした高速道路やビルが建っている。帰国翌日、東京で車窓から橋を見て、エチオピアで視察したアワシュ橋を思い出した。ジブチ

港との貿易の大部分を担う主要な橋であるにも関わらず、車は一台ずつしか通れないという状態であった。

全てが整っていることが「普通」である日本に生まれ育ち、生活していると日本の素晴らしさに気付くことはない。しかし今回のエチオピア派遣でODAの現場を視察して帰国した時、私は本当にこの国の技術と整備された状態を誇りに思った。そして同時に、日本が世界で成せる事はたくさんあると痛感した。技術協力など民間企業を呼び込んでのビジネス、青年海外協力隊・シニア海外ボランティアなどのボランティアやNGOセクターを通じ、日本はエチオピアやアフリカの発展の為に伝えられる事がたくさんあると肌で感じた。そしてそれは決して先進国からの上から目線の「与える援助」ではなく、未来のパートナーとしての「助け合い」である。国際協力活動など難しい言葉で語らなくてもいい。友人が困っていたら助けるだろう、それと同じことではないだろうか。

現に2011年の東日本大震災発生時にエチオピア政府は544万5,215.55ブル、日本円にして約2,500万円の義援金を寄付している。近年経済発展を遂げているとは言え、依然として世界最貧国の一つであるエチオピアからの約2,500万円もの義援金だ。この事を踏まえて、もう一度「国際協力とは何か」について考えて頂きたい。

### ●この報告書を読んで下さった皆様へ

この報告書のページを開いて下さっている、あるいはオンラインで読んで下さっている方々は自ら「ODAについて知ろう」としている方達だと思う。

その一步に感謝しつつ、ODAやJICAを批判する方々の多くはおそらくその一步を踏み出さないのだという現実も、国際協力レポーターとして私はしっかりと受け止めている。

私達国際協力レポーターが本当に伝えるべき人達はその一步を踏み出さない人達だと私は考える。ODAやJICAが何故批判されるのか、たくさんの理由の多くはその「不透明さ」と「知らないことからくる不安」からなるものではないか。JICA広報が伝え切れないことを、JICAが伝えることが出来ない層に、一国民、そして等身大22才の大学生として伝える。それが私の国際協力レポーターとしての役割だと自覚している。だからこそ私はこれから大学の友人を集め、エチオピア珈琲と共にエチオピアで見たことや国際協力について話し、商店街やレストランで写真展を行い続ける。これも私に出来る小さな国際協力であると考えている。

そして一つ、この報告書の読者の皆様にもお願いがある。どうか、「今日、JICAの派遣でエチオピアへ行ってODA資金の使われ方を見てきた人のレポート読んで…」と周りの人に一人だけでも話してみたい。家族でも友人でも恋人でもいい。もしくはツイートして欲しい。Facebookで簡単にでも書いて欲しい。日常生活では考える機会のない、遠く離れた国への日本の国際協力活動であるが、その繋がりがほんの小さな変化を起こすと私は考えるからだ。

そして最後に、私が尊敬するネルソン・マンデラ氏の遺した言葉で私の報告書を締めくりたい。このシンプルな言葉こそが、国際協力の真髄ではないだろうか。

“We can change the world and make it a better place. It is in your hands to make a difference.”



首都アジスアベバの夜景。日本人が持つアフリカのイメージとはおそらく異なるであろうこの夜景を目の前に、この国のこれからを考えながら撮影した  
撮影：9月1日（月）  
宿泊先のホテルの部屋からの風景